

異文化に触れる、自分を磨く

～大洲市中学生海外派遣事業～



私たちは、あらゆることを経験し触れることで、壁にぶつかりながらも成長することが出来ます。見て、聞いて、話して経験したことは、必ず自分の糧となり、将来に生かすことができるはずです。

次代を担う子どもたちにとって、世界を知り、感じることは人生でも大きな一歩です。

大洲市では、次世代の大洲市を担う中学生を対象に、「大洲市中学生海外派遣事業」を行っています。

これは異国の文化、歴史、経済、生活習慣および国民性の違いを肌で感受し、その体験を通して国際的な感覚の涵養と視野を広めることにより、国際化時代にふさわしい人材を育成することを目的に実施されています。

今年度は市内8校、12人の中学生が、7月29日～8月12日の日程で、オーストラリアのケアンズに出發しました。現地では、ホストファミリーの家庭でホームステイをしながら、語学学校で英語の授業を受けるなど、さまざまな交流を行いました。

今月号では、中学生海外派遣事業での感想を紹介します。

平成25年度 大洲市中学生海外派遣事業日程

7月29日(月)	大洲市を出発、関西国際空港からケアンズ空港へ
7月30日(火)	現地観光、各ホームステイ先へ
7月31日(水) ～ 8月9日(金)	語学学校で英語の授業、現地学校交流授業
8月10日(土)	ホストファミリーとお別れ、ケアンズウォークラリー
8月11日(日)	ケアンズ空港から関西国際空港へ
8月12日(月)	バスにて大洲市へ



後藤 つむぎ さん (大洲南中)

ホームステイでお世話になったマシュー家は、仲の良い温かい人たちでした。緊張のため、ほとんど会話できなかった私に、家族同様に接してくれ、理解できない会話があると簡単な単語で言い換えたりして、ゆっくりと話してくれました。いつの間にか、ジェスチャーなどでどんどん会話をする自分がいました。外国でのコミュニケーションに大切なことは、会話力ではなく、相手に「伝えたい」、相手を「理解したい」と思う心だと実感しました。外国語は、人生を豊かに広げてくれる楽しいものだと思ひ、今後の英語学習に励みます。みんなと過ごした15日間は私の一生の宝物です。

今年の夏休み、私はとても貴重な体験をしました。ホストファミリーや現地の人々はとても優しく、英語が上手く話せず聞き取れなかった私に、分かりやすい単語で会話をしてくれ、約2週間安心して過ごすことができました。語学力はもちろん大切ですが、それ以前に聞き取る力が必要だと思いました。私は今回、リスニング力や語学力の上達と同時に、文化や歴史、生活の違いなど多くのことを学ぶことができました。特に、環境問題が深刻化している現地の取組みには、日本人が見習うべきことがたくさんありました。この経験を無駄にしないように、自分の将来へ生かしていきたいです。



水本 莉々華 さん (大洲南中)



河本 優輝 さん (大洲北中)

現地でのホームステイは、初めは緊張したけれど、現地の人たちはすごくフレンドリーで優しく接しやすかったです。だから、自分の家族や日本のおみやげを紹介したり、ホストマザーからも現地のことや家族について紹介してもらったりと、気軽に話すことができました。現地で生の英語に触れる体験をして、これからの勉強の励みになりました。また、英語以外にも手伝いや水の大切さ、住む上で相手の生活に合わせることを学び、自分自身を高めることができました。この2週間の体験で以前の自分よりも、少し上の自分へステップアップできたと思います。とても貴重な体験でした。

「I change myself」それが私の目標でした。15日間を振り返ると、確かなものとはいえないけれど、これからの自分に勇気を与えてくれるエネルギーのようなものを手に入れた気がします。それは、英会話で苦勞している私に、ゆっくりと分かりやすい英語で話しかけてくれた周りの人たちのおかげです。笑顔で話しかけてくれたことで、自分から積極的に話してみようと思えるようになりました。失敗することもあったけれど、それ以上に話す楽しさを感じることができました。帰国後、ファミリーからメールが来た時はうれしかったです。勇気を出して事業に参加して本当によかったと思います。



戎井 陽歩 さん (大洲北中)



別宮 幸 さん (平野中)

私は海外派遣事業に参加して、いろいろなことを学び、たくさんの思い出ができました。一番の思い出は、現地の学校で過ごした時間です。生徒のみんなは授業で習った日本語で「こんにちは」と、笑顔で声をかけてくれたり、何回も「ユキ！」と私の名前を呼んで、遊びに誘ってくれました。また、私が英語を聞き取れなかった時、理解できるまで何度も繰り返し話してくれたことがうれしかったです。私は、必死で相手に自分の気持ちを伝えようとすれば、相手もそれに応えてくれるということを学びました。この2週間は、毎日見るもの感じるものが新鮮で、とても充実した日々でした。

現地ではたくさんのことを学びました。まずは、言語と文化についてです。私たちの学校では、アメリカ英語を学習しているけれど、現地では主にイギリス英語が話されています。同じ英語でも双方には違いがあり、聞き取ることが難しかったです。また、日本とは違い靴を脱がなかったり、お風呂にお湯をためないなど、文化の違いに触れられたことは、大きな経験になりました。ケアンズは、グレートバリアリーフや熱帯雨林などが有名で、日本では見られないものや自然があり感動を覚えました。今後、貴重な体験ができたこの事業で学んだことを、将来に生かせるようにしたいです。



和家 稜真 さん (肱東中)



丸山 倂史 さん (肱東中)

今回初めて海外に行ったけれど、出発前も現地到着後も大きな不安はあまり感じられませんでした。海外に来たと実感できたのは、周りに日本人がいないと感じた時です。現地はとても生活しやすく、日本が一番だと考えていた自分は、その時初めて海外で過ごすことの意味を知ったように思います。「楽しい思い出として帰国してほしい」と言ってくれたホストファミリーであるウェリス家のみなさんをはじめ、市役所関係者や現地の友達、先生たち、本当にありがとうございました。今回学んだことを自分の生活に生かし、たくさんの人に現地での出来事を伝えていきたいです。

最初は緊張してうまく話すことができず、身振り手振りで話していたけれど、ホストファミリーが優しく接してくれたので、すぐに仲良くなることができました。休日には買い物や釣りに行き、見たこともない大きな魚を釣るなど、忘れられない時間を過ごすことができました。学校の午前中は生の英語の授業、午後からは現地の小学校で英語を分かりやすく教えてもらい、多くの友達をつくることができました。今回の海外派遣で文化や習慣の違いを知り、英語だけでなく時間の使い方、水や電気の節約の仕方を学びました。この経験をこれからの自分の将来に生かしていきたいと思います。



鈴木 徳仁 さん (新谷中)



久保 範崇 さん (長浜中)

出発前、海外派遣の準備を整えるにつれて、現地で会える人たちへの期待や不安が高まってきました。ホストファミリーに会ってみると、日本のことをよく知っていて、日本は文化や景観が素晴らしいという話を聞いた時、改めて日本はすごいと感じました。滞在中には、テーブルマナーや英会話を教えてもらい、親切で頼れる存在だと思いました。地元の小学生との交流では、授業や休憩時間の会話を通して毎日楽しく過ごすことができました。生の英語に触れる貴重な機会を生かし、積極的に会話をすることができました。この充実した経験を、今後の生活や将来に役立てようと思います。

私は現地に着いた初日、言葉が分からなくてホストファミリーの前で泣いてしまいました。その時のホストマザーの言葉が心に残っています。「ごめんなさいは言わなくていい。あなたは何でもできる。ここは、あなたのオーストラリアの家です」この言葉の意味が分かった瞬間、元気が湧いてきました。それから、ファミリーとは毎日夜遅くまで会話し、最後にはソファでテレビを見るなど、本当の家族のように過ごすことができました。また、地元の小学校との交流などを通して、国籍は違っても人の心は同じであると感じました。これからは英語をはじめ、いろいろなことに励んでいきたいです。



大津 百萌夏 さん (長浜中)



大野 綾華 さん (肱川中)

私は今回、自分の英語力を試すことをとても楽しみにしていました。しかし、現地の人たちの会話のスピードについていけず、初めは聞き取ることがほとんどできませんでした。それでも、何回も繰り返して発音してくれたり、私もジェスチャーを使って伝えることで楽しく過ごすことができました。その結果、徐々に英語も聞き取れだし、思っていることを少しずつ話せるようになりました。2週間の体験を通して文化の違いを学び、視野を広げる良い機会となり、英語の勉強をより楽しくやりたいという気持ちも強くなりました。今回学んだことを、これからの生活に生かしていきたいです。

2週間の海外派遣で、私は自分の英語力のなさを痛感しました。語学学校で8日間、私たちが英語を学んだグレン先生や現地のホストファミリーに、自分の思いを上手に伝えることができなかったからです。そんな私でも、充実した2週間を送ることができたのは、ホストファミリーをはじめ現地在住の日本人など、多くのおみなさんのおかげです。現地の小学校では、10年間東京に住んでいた女の子と一緒にグループになりました。瞬時に英語から日本語へ、日本語から英語へ通訳していた彼女は、とても格好良く見えました。私も将来、日本と外国をつなぐ架け橋になりたいと思います。



森川 紫苑 さん (河辺中)

分からない、うまくいかない、それが大切



団長
新谷中学校 校長 東山 宏^{ひろし}



引率
新谷中学校 教諭 西山 武寿^{たけひさ}

ケアンズは、オーストラリアの北西部に位置し、世界自然遺産で世界最大のサンゴ礁地帯である『グレート・バリア・リーフ』の中心部にあります。常夏で日差しが強く熱帯雨林気候の季節に当たり、気温は最低で14度、最高が27度くらいです。観光地ということもあり、日本人観光客も多く、日本人経営の土産店やラーメン屋などもあり、数々の表記も必ずといっていいほど日本語や中国語がありました。

そんな町で12人の生徒は、ホームステイという貴重な経験をしました。初めは、相手の言うことがさっぱり分からない様子でしたが、日を迫るにつれて表情にも余裕が見られ、英語漬けの生活にもすぐに対応できるのはさすがであり、若さと意欲を感じました。また、午前中は語学学校での英語の授業、午後はエッジヒル・ステイトスクール（1～7年生）の7年生のバディと一緒に授業を受けました。小学校は、パプアニューギニア人など、移民の国らしく様々な国籍の児童が在籍していて、各学年の中には日本人も数人いました。

こういう文化の違いを「肌で感じる経験」は、なかなかできません。この経験を生かすとともに、今後も様々なことを学び、まずは「素晴らしい日本人」になってほしいと思います。そうすることが、本当の意味での国際理解につながるのではないのでしょうか。

この事業にご支援、ご配慮をいただいた関係者の皆様には、心より感謝をしています。

「ハイ、タケ。ビヤ？」自家製ビールを毎日勤めるデビットに、私はもちろん「イエス、プリーズ」。食事のあいさつに興味を示したので「Eat a dead mouse」と覚えるといいですよとアドバイスをして、『いただきます』を教えました。この日本語は難しく、奥さんのデブラはいつも間違え、日本人が漢字やひらがな、カタカナの3種類の文字を使いこなすことに驚いていました。滞在のお礼に作ったお好み焼きは大好評で、香ばしい豚肉やソースの味を大変気に入ってくれました。

訪れた小学校には、白人のほかに南米や東南アジアなど、様々な人種の生徒がいて、みんな違って当たり前の大前提がありました。この違いを意識しない素朴さを、島国に育つ日本の生徒にも持ち続けてほしいと感じました。授業で桃太郎の紙芝居をすることになり、「一人で戦うスーパーマンやスパイダーマンと違い、日本のヒーローはみんなで力を合わせます。協力って大事ですね」と締めくくると、みんな納得の表情でした。教室の壁には一面カラフルな掲示物が飾られ、いじめ（bully）をなくすポスターや人生訓が数多くありました。そのうち、私が気に入った言葉が「人生があなたにレモンを与えたならば、あなたはそれをレモネードにしよう」です。

私は今回、かつて経験したことの無い濃厚なレモネードを味わうことができました。見聞を広げる機会を与え、様々な調整をしていただいたみなさんに、感謝の気持ちでいっぱいです。

言語や生活習慣が日本と異なるホストファミリーとの触れ合いは、戸惑いと不安の連続だったことでしょう。しかし、分からないことに直面した時、自分なりに解決策を模索しようとする姿勢が、何物にも替え難い経験になります。何事にも挑戦していく気持ちが、将来子どもたちの大きな財産となるはずで